慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	根拠地における党と農民(一) : 鄂豫皖根拠地、一九三一年～一九三五年
Sub Title	The party and peasants in a revolutionary base area: E-Yu-Wan Base Area, 1931-1935 (1)
Author	高橋, 伸夫(Takahashi, Nobuo)
Publisher	慶應義塾大学法学研究会
Publication year	2000
Jtitle	法學研究 : 法律・ 政治・ 社会 (Journal of law, politics, and sociology). Vol.73, No.3 (2000. 3) ,p.1- 32
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	論説
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00224504-20000328-0001

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

根拠地における党と農民（一）

——鄂豫皖根拠地、一九三一年～一九三五年——

高橋伸夫

序　論
第一章　鄂豫皖根拠地の形成と展開
（1）　形　成
（2）　発　展
（3）　衰　退
第二章　党組織
（1）　党　員
（2）　党内コミュニケーション
（3）　価値と行動様式……（以上本号）
第三章　党と農民
（1）　ソビエト、大衆組織、農民
（2）　土地改革と農民
（3）　紅軍と農民
（4）　反革命分子と農民
（5）　青年と女性
結　論……（以上七三巻四号）

序論

革命のなかで農民を、ある場合には積極的参加者にし、別の場合には反革命の側に回らせ、さらに別の場合にはたんなる傍観者にさせるのは、どのような社会的、経済的、政治的、そして文化的諸条件の作用によるのだろうか。外部からやってくる革命勢力に真先に結びつくのは、農村のいかなる階層なのだろうか。逆に、革命を阻止する勢力に味方するのは、どの階層だろうか。反乱を担う階層と、革命を担う階層は異なるのだろうか。そもそも、革命に対する農民の各部分の反応を分析する際、階層という範疇はどれほど有効なのだろうか。革命の過程で農民の世界観、価値、行動様式、社会的結合の様式はどの程度変化を遂げるのだろうか。言い換えれば、革命は農村の伝統文化にどれほどはっきりとした断絶をもたらすのだろうか。これらは、革命のなかで農民が演じた役割を考える際に欠かすことのできない問題群である。

この研究の目的は、以上のような一般的諸問題を念頭に置きつつ、一九三〇年代前半に中国共産党が構築し、維持しようとしたひとつの革命根拠地に焦点を当て、党と農民の相互作用の諸相を具体的に明らかにすることである。ここで相互作用という言葉は、筆者が次のような公式の党史が常に示唆してきた革命過程の基本的理解に異議を唱えるために意図的に用いてある。その理解とは、固く結束した党組織が、農村社会における階級闘争を演出しつつ、曲折はありながらも、主として貧しい農民の支持を得て、彼らを新たな規範秩序に組み込んでいったというものである。このような理解は、暗黙のうちに、一方で厳格で外部からの操作や浸透を容易に許さない党組織を、他方で受動的で変わりやすい農民像を前提としている。だが、このような前提は、いずれも支持し難いものである。

第一に、党組織はどうみても固くまとまっていたと考えることはできない。筆者はすでに一九二〇年代末の湖北省の党組織を分析した際、党組織がいかに「散漫な」性格を持っていたかを強調しておいた。それは、いわばごく薄い浸透膜で覆われた組織であり、加入と離脱（そして再加入）が比較的容易に行われていた。そのために、党員の流動性は大きく、外部の諸集団と人的にも、また価値や行動様式の点でも境界は曖昧であった。さらに、党内コミュニケーションが垂直的にも、水平的にも途絶えがちであったことから、地方党機関は孤立した環境において、その土地独特の社会経済的環境に適応しつつ、独自に調達した資源と独自の判断により、「革命」運動を展開していたのであった。[1] このような外部に対する開放性の大きい党組織は、それが根を下ろそうとした地方社会のネットワークと文化に容易に取り込まれる可能性があった。

第二に、農民たちを無力で、受動的な存在だと決めてかかるわけにはいかない。スコットのいう「日常的抵抗」[2]、フィッツパトリックの描く「サバルタン戦略」[3]など、彼らは外部からの権力の浸透に対処するために、個人的、あるいは集団的に動員しうる資源――社会的影響力、富、情報収集力など――を用いて、ある種の能動性をもって個別的・集団的な戦略を発動するのが常である。これらの戦略は、農民たちが公然たる反抗に立ち上がらずとも、自分あるいは自分の属する集団の生存を確保し、またその利益の伸張を図ることを可能にした。彼らは外部から迫る権力が打ち出す政策に対し、自らの利害関心のもとに、ある場合には加工を施し、別の場合には便乗して、その特定の側面を突出させ、さらに別の場合には面従腹背の態度を取った。このように、外部から浸透する新たな権力に適応しつつ抵抗し、同調しつつ利用する農民の諸戦略を、いささかぎこちない表現であるが「勝手な包摂」と呼んでおく。[4]（「勝手な包摂」は個人としての決定に基づく場合もあれば、集団としての決定に基づく場合もある。その諸戦略は、農民の利害得失の計算に基づく合理的選択を前提としている。もし、それらが個人的に適用

されるなら、農民のイメージはポプキンの描く利益の極大化を追求する「ラショナル・ペザント」に近いものとなるだろう。[5] だが、実際には、農民は個人的利益の極大化を犠牲にして、家族や宗族、それ以外の自分が所属する集団の利益を優先する場合があったであろう。したがって、純粋に個人的な打算だけをこれら諸戦略の背後にみることはできない。）

実際、いかなる政治・社会秩序といえども、実際にはあらゆる外からの浸透や操作をはねつけるほど緊密に組み立てられているわけではない。農民はその間隙に入り込んで行動の自由を確保し、可能な場合には、さらにそれを拡大しようと試みていたであろう。また、党が発するメッセージも、額面通り農民に受け取られたわけではない。それらは彼ら独自の利害関心、および彼らの文化的枠組みに基づいて意味を変形されるのが常であった。「勝手な包摂」とは、まさにこうした党の意図と結果の間にズレを生み出す「御しがたい」農民による権力の受容の態様を指しているのである。

以上の想定に立てば、厳格に組織された党が、受動的な農村社会を一定の青写真にしたがって一方的に再編成していくという歴史の筋書きは承服しがたいものである。われわれは党と社会との動的な相互作用、そして農民の諸戦略に対して開かれた社会空間を想定したほうがよいであろう。そのかぎりで、中国の共産主義者が推進した革命を、はじめから方向が定まった、一貫性を持つ過程とみなすわけにはいかない。その過程は、多くの小休止や逸脱や逆転を含む、また逆説を孕んだ複雑なものであったと考えるべきなのである。このような前提に立って、この論文では散漫な党組織による「上から」の浸透と「御しがたい」農民による「下から」の勝手な包摂との相克、もしくは循環のなかで、革命根拠地の農村とそこに暮らす人々に何が生じていたか――彼らの主観的世界を含めて――を可能な限り具体的に明らかにしようと思う。

以上のような視角からの革命運動の考察は、必然的にわれわれを革命の概念の再構築に導くだろう。この概念

は、歴史におけるある種の断裂を作り出す行為を指し示してきた。革命とは、結局のところ、伝統文化の廃墟の上に、一定の青写真に照らして新たな政治・経済・社会構造を築く行為なのであろうか。それは、それに参加する者の意図あるいは主観的世界と行為の結果の両方において、旧社会の部分的ないし選択的破壊――したがって伝統文化の温存を帰結する――を目的とする反乱とは本質的に区別されるべき行為なのであろうか。この研究は、限定された地理的空間と時間の範囲内で、革命勢力と農民の関係を具体的に扱うものであるが、歴史的個性の把握を超えて比較政治学上の、あるいは歴史社会学上の一般的諸問題との対話に資することをも目的としている。

第一章では、舞台となる鄂豫皖根拠地の形成と発展について歴史的な概観を試みる。続く第二章では、この地域に浸透しようとした党組織の性格について、いくつかの側面から検討が加えられ、その「散漫な」性格が浮き彫りにされるだろう。第三章においては、農民が用いた「勝手な包摂」の諸戦略がいかなるものであったかが具体的に明らかにされる。そして最後に、党員が農村における文化の変容に果たした役割について考察が加えられる。

（1）高橋伸夫「中国共産党組織の内部構造――湖北省、一九二七年～一九三〇年――」、『法学研究』第七一巻第五号（一九九八年五月）。

（2）ジェームズ・C・スコット「日常型の抵抗」、坂本義和編『世界政治の構造変動』3（発展）、岩波書店、一九九五年。

（3）Sheila Fitzpatrick, *Stalin's Peasants: Resistance and Survival in the Russian Village after Collectivization* (New York: Oxford University Press, 1994), p.5.

（4）この概念は、シャルチエの「独自の摂取＝利用」という概念から示唆を得ている（ロジェ・シャルチエ著、松浦義弘訳『フランス革命の文化的起源』岩波書店、一九九九年）。だが、「勝手な包摂」は、党の政策を「下から」台無

しにしてしまうだけではない。それは、後で述べるように、党の政策に対して阻止的であると同時に、促進的な効果を持ち、その結果、革命の過程に不確実性を与えるものとしてイメージされている。

(5) Samuel L. Popkin, *The Rational Peasant: The Political Economy of Rural Society in Vietnam* (Berkeley: University of California Press, 1979).

第一章　鄂豫皖根拠地の形成と展開

分析の対象としてこの根拠地を選択したのは、それがかつて筆者が分析を試みた湖北省と河南省の党組織の活動によって形成されたものであり、その限りで通時的な比較が可能となるためである。

(1) 形　成

まず、われわれは鄂豫皖根拠地の形成について、大雑把に歴史的経緯を振り返ることにしよう（この論文では、中国の各省について、便宜上略称を用いる。鄂とは湖北省を指し、豫は河南省を、皖は安徽省を指す。したがって、鄂豫皖根拠地とは以上の三省にまたがって形成された根拠地を意味し、鄂豫皖辺区とは三省の境界地域を意味する）。一九二七年八月、中共湖北省委は八七会議の決定に基づき、秋収暴動の計画を策定し、全省を七つの区域に分けて計画を実行に移した。九月下旬に始まった黄安、麻城両県における暴動は、当地が誇る比較的強固な農民運動の基礎にもかかわらず失敗に終わった。蜂起の敗残部隊は一九二八年一月、労農革命軍第七軍と名乗り、のちに労農紅軍十一軍第三一師に改編された。だが、百名にも満たないこの部隊が成しえたことは、大別山脈中の柴山堡の根

拠地をかろうじて維持することだけであった。[1]

一九二九年三月、蔣介石と有力な軍閥たちとの間で戦争が始まると（蔣桂戦争）、国民政府軍が撤退し、共産党にとって根拠地を発展させる好機が訪れた。同年五月までに、根拠地は、北は光山県柴山堡から南は黄安県八里湾および桃花と麻城近郊に至り、東は麻城県の黄土崗から西は孝感県汪洋店付近に至る地域に拡大していた。これで柴山堡を中心とする鄂豫辺革命根拠地が形成された。[2]

一方、中共河南省委員会は、八七会議後、同省を三つの地域に分けて暴動を起こした。一九二七年一一月、確山県劉店、信陽県四望山で暴動が成功し、四望山を中心とする赤色区域が誕生したが、それはわずかの間保持できたにすぎなかった。同省委は翌年三月に再び暴動を起こし、商城、固始で武装割拠を実現した。一九二九年春、やはり国民政府軍の圧力が後退するとともに、共産党は攻勢に転じることができた。五月、商城南部での暴動が成功し、労農紅軍十一軍第三二師が誕生した。その後、数カ月の努力を経て、南溪、呉家店を中心とする豫東南革命根拠地が築かれた。[3]

二つの根拠地の拡大とともに、一九二九年九月二四日、黄安、麻城、黄陂、羅田、黄崗、商城、光山、羅山八県が鄂豫辺特別区に編入され、中共鄂豫辺特委の指導のもとに置かれた。これにより鄂豫辺、豫東南の二つの根拠地は二つの紅軍とともに統一されたのであった。[4]

安徽省でも、八七会議後、六安を中心に秋収蜂起が試みられたが、公式の党史が「成功」と呼ぶような暴動は、一九二九年五月の六霍暴動を待たなければならなかった。同年十一月、再び六霍で暴動が始まると、三つの遊撃隊を合併して労農紅軍十一軍第三三師が成立した。紅軍第三三師は三二師と共同で作戦を行い、一九三〇年四月下旬までに、六安、霍山、霍邱、英山、潛山の五県からなる皖西革命根拠地を築き上げた。それは、東は淠河か

ら西は商南に至り、北は白塔畈、丁家集から南は金家鋪、水吼嶺に広がる人口四〇万人を抱えた地域であった。[5]

党中央は一九三〇年三月、鄂豫皖辺特委を成立させるとともに、河南、湖北、安徽の赤色地域を鄂豫皖辺特別区に編入する決定を下した。併せて、党中央は紅軍三一師、三二師、三三師を合併して労農紅軍第一軍を編成し（兵力は二一〇〇名であったという）、それを党中央の直接指導下に置いた。同月、党中央の決定に基づき、中共鄂豫皖辺代表大会が黄安県で開催され、郭述申を書記とする中共鄂豫皖辺特委の成立が宣言された。続いて六月下旬には、鄂豫皖辺区第一回労農兵代表大会が光山県で開催され、鄂豫皖辺区ソビエト政府が誕生した。[6]

（2）発　展

公式の党史は、一九三〇年夏から秋にかけて、李立三路線が、他の根拠地と同様、鄂豫皖根拠地に対しても破壊的な影響を及ぼしたことに触れている。それによれば、中央事委員会長江弁事処と中共長江総行動委員会は鄂豫皖辺区に対して、「早急に武漢周辺の地方暴動を発展させ、武漢を中心とする全国総暴動に呼応する」よう要求したのであった。この要求に基づき、紅第一軍は、平漢鉄道を切断し、広水、信陽を攻撃したが失敗に終わり、次いで光山、羅山を攻撃した。だが、同軍が北上し河南省南部で作戦を展開している間、各地の暴動は紅軍主力の支援を受けられず鎮圧されてしまった。その結果、根拠地はほとんど失われ、二万三千名の幹部と大衆が殺害されたという。[7] だが、一九三一年一月中旬に、紅第一軍と鄂東で組織されたばかりの紅第一五軍が合併され、一万二千五百人からなる紅四軍が成立したことが事実であれば、[8] 李立三路線がそれほど大きな損失を根拠地に与えたとは考えにくい。むしろ、李立三が自らの冒険主義的計画を各根拠地に実行させようと躍起になっていたにもかかわらず、鄂豫皖根拠地は拡大しつつあったとみたほうが真実に近いように思われる。実際、それは一九三〇

年末までに、東は六安、潜山から西は応山、棗陽に広がり、北は息県南部から南は黄梅、広済に至る広大な区域に発展したのであった。[9]

このような発展の趨勢は、一九三〇年一二月、国民党による第一次囲剿が開始されても続いた。翌年春には、根拠地の総人口は二百万人に拡大していた。四月に、蔣介石は第二次囲剿に着手するが、共産党はこれも撃退した。その過程で紅四軍は二万人近い兵力を抱えるようになった。また根拠地の面積は当初の二倍となり、人口も二五〇万人に増えた。[10]当時、根拠地は、東は淠河から西は平漢鉄道に至り、北は黄川、固始南部から南は黄陂、羅田北部に至るようになっていた。[11]

拡大を続ける鄂豫皖辺区に党中央は、六期四中全会後の一九三一年四月、ソ連留学帰りの沈沢民、陳昌浩を派遣し、次いで政治局員の張国燾を送り込んだ。鄂豫皖辺区に自らの意思を貫徹させようとする党中央の意思は明白であった。張国燾は、回想録の中で次のように述べている。「紅四軍の師団以上の幹部の大多数は中央から派遣されたものであり、連隊以下の幹部の多くはソビエト区の古い遊撃幹部である」。[12]一九三一年五月、中共鄂豫皖中央分局と新しい鄂豫皖革命軍事委員会が成立し、いずれも張国燾が牛耳った。間もなく、沈沢民を書記とする中共鄂豫皖省委も成立した。公式の党史によれば、中央分局は、中共鄂豫皖特委と皖西臨時分特委の工作を全面的に否定し、王明に代表される「左傾」の冒険主義的な路線を鄂豫皖辺区に押し付けたのであった。「左傾」路線の影響はすぐに現れた。すでに土地改革が行われた地域で改めて土地の分配が行われた。富農に対する従来の融和的な政策が改められ、富農の土地がすべて没収された。そのうえ、大がかりな粛清が開始された。[13]この粛清は、中国各地に分散したソビエト区を自己のもとに完全に従属させようとした王明ら党中央の――そしてそれを体現しようとした張国燾らの――意思と、上海の党中央を恐怖に陥れた顧順章の裏切り事件が鄂豫皖辺区でも

再現されるのではないかとの恐怖が交錯したところに生じた。[14] まず軍内で反「改組派」を名目に粛清運動が展開され、それは各党機関、大衆団体、地方部隊に及んだ。その結果、張国燾が明らかにするところ、逮捕者六百名、死刑三〇名、有期徒刑約百名を数えた。[15] だが、この数字は、当時の鄂豫皖辺区各地からの報告書が伝える粛清の模様に照らして、明らかに過小評価されている。[16]

張の指導下に置かれた紅四軍は、一九三一年七月、英山、羅田、広済、浠水の四つの県城を攻略した。そして、一一月七日には紅四軍と紅二五軍を併せ、約三万人からなる第四方面軍が成立した。これ以前に、各県の赤衛隊、遊撃隊は赤衛軍に改編され、各県の赤衛軍司令部によって指揮されていた。第四方面軍は翌年六月中旬までに敵が発動した第三次囲剿を退けた。この過程で鄂豫皖革命根拠地は最盛期を迎えた。一九三二年初の時点で、党員数は一万六千人に達した。[17] 同年半ばには総兵力は四万五千人を数え、それに二〇万人の各県独立団、遊撃隊、赤衛軍が加えられた。根拠地は大きく拡大し、東は舒城から西は平漢鉄道を跨ぎ、北は淮河に迫り、南は黄梅と広済に至る合計二六県、黄安、商城、霍邱、英山、羅田の五つの県城を含む地域に発展し、三五〇万の人口を抱えた。[18] この目を見張るような発展が、一九三一年九月の満州事変、一九三二年二月の上海事変と続く日本の侵略強化の時期に対応していたことは注意しておくべきであろう。鄂豫皖辺区だけでなく、ほぼすべての共産党の根拠地が一九三二年前半に目覚しい成長を遂げていた。王明が命じた進攻路線は、幸運にも根拠地を取り巻く客観的な環境によって一時的に許容されていたのであった。

だが、冒険主義的な路線が命じた進攻と、それに対して繰り返された国民党の掃討作戦は、党、ソビエト機関、紅軍の人員をきわめて流動的にしただけでなく、根拠地の絶えざる拡大と縮小、形成と消滅をもたらすことになった。したがって、われわれは根拠地を地図の上に線を描いて示すことのできる、多少なりとも確定された領域

として思い浮かべてはならない。それは、一カ月先の形を予測することもできないほど、形状の定まらないものであった。自らの運命に対する予測可能性の低さが、根拠地における農民の心理と行動に与えた影響がいかなるものであったかを後にわれわれはみるであろう。

（3）衰　退

蔣介石は一九三二年六月、第四次囲剿を開始した。過去三回の掃討作戦の矛先が主として中央根拠地に向けられていたのに対して、今回の攻撃は、まず急速に勢力を拡張していた鄂豫皖辺区、湘鄂西辺区へと向けられた。[19] このとき、過去の勝利に酔っていた張国燾は、徐向前らが主張した部隊を休息させるべきだとの意見を退け、かえって「停滞することなく進攻する」という戦略を主張した。彼は紅軍主力を平漢線に出撃させ、武漢を攻略し、「一省数省首先勝利」の実現を目論んだのであった。[20] 作戦は失敗に終わり、紅軍の形勢は日増しに不利となった。一〇月一〇日、党中央分局は紅安県で緊急会議を開き、「鄂豫皖ソビエト区はすでに防衛不可能となった」と結論付け、[21] 第四方面軍の主力約二万人を平漢線の西側に撤退させることを決定した。[22]

紅軍主力に置き去りにされた根拠地は、その後、当然のようにその大部分が失われた。鄂豫皖根拠地は、大別山脈を境として東西に隔絶された鄂豫辺区と皖豫辺区の二つに分かれてしまった。紅軍もまた分散し、鄂豫皖省委も一時それらを統一的に指導することができなくなった。明らかに、根拠地は衰退過程に入った。

それでも、省委は一九三三年四月、新たに約一万人の兵力からなる紅二五軍を編成した。また、同月下旬、皖西北道委が兵力一千名の紅二八軍を組織した。[23] ところが、公式の党史によれば、党中央が再び中心都市の奪取を指示したため、省委にまたもや冒険主義的ムードが高まり、敵が守備を固める七里坪の攻撃が決定された。紅二

五軍は四三日間の戦闘の末、六千人の兵力を失う大敗北を喫したのであった。[24]

一九三三年夏、蔣介石は劉鎮華を鄂豫皖三省辺区の「剿匪」総司令に任命し、第五次囲剿を開始した。しかし、中共鄂豫皖省委は敵がたんにソビエト区の秋の収穫を阻止しようとしているのだと思い込み、「秋収の保障」が党と紅軍の主要な任務だと規定した。そのため、鄂東北の中心部にまで進攻してきた敵に対処することができず、紅二五軍は八月末までに一五〇〇人の兵員を失い、皖西に撤退した。[25] 劉鎮華は紅軍の主力が皖西北に移動したのをみて、九月上旬、四方から皖西北根拠地の中心部に攻撃をかけた。またしても防衛戦に敗北し、三千人にまで減少した紅二五軍は鄂東北に戻ることを決定した。だが、帰還する途中、国民党軍に挟撃され、さらに兵力が失なわれた。一方、皖西北では、紅二五軍の後続部隊と紅八二師が合併して二三〇〇人からなる紅二八軍が改めて編成された。[26] だが、党内文書によれば、紅二八軍は、もはや自らの生存を維持することで精一杯であるかのように、「この数ヵ月打糧〔食糧の確保を意味する〕以外は何もしていない」のであった。[27] 党員数も、一九三三年一〇月には、鄂東北でわずかに二百数十人を数えるのみとなった。[28]

困難な状況に直面した省委は、極端に分散的な軍事活動の形態である便衣隊の活動に活路を見出そうとした。一九三三年一一月に沈沢民が党中央に送った報告によると、「この運動はもともと大衆の中から自然に起こった革命的農民の運動であり、三人から五人で一隊を作り、短銃、短刀、矛などの武器を用いて、夜間に反動分子を襲撃して殺すものである。……われわれは現在、党、ソビエト、紅軍、遊撃隊のすべての力を用いて、この種の武装形式を発展させることを決定した」。[29]

一九三四年四月、蔣介石は東北軍の半数以上の部隊を華北から鄂豫皖辺区に移動させたうえで掃討のための体制を強化した。これに対応するため、鄂豫皖省委は紅二五軍と紅二八軍を合併し、三千人からなる新たな紅二五

軍を編成した。紅二五軍は再び皖西北に移動し、羅田県城を攻撃した。その後、同軍は鄂東北に戻り、七月中旬までに南北六〇里、東西四〇里の遊撃根拠地を回復した。[30] 公式の党史によれば、「情勢は次第に好転し」、八月になると鄂東北に四つ、皖西北に六つのソビエト区が打ち立てられた。[31] だが、われわれはこの表現を額面通り受け取るわけにはいかない。もはやソビエト区とはほとんど名ばかりであった。鄂東北のソビエト区は、一つを除いていずれも山間に設けられ、せいぜい二百人から三百人が生活していたにすぎなかった。[32] 巡視員の報告は、もっと率直に「ソビエト区には大衆がいない」と伝えている。[33]

一一月下旬――すでに中央根拠地は崩壊していた――省委常務委員会が開かれ、党中央と特派員が伝えた周恩来（中央軍事委員会副主席）の指示に基づき、今後の方針が議論された。その結果、紅二五軍を西へ移動させることが決定された。その目的は、公式の党史の示すところ、新たな根拠地を開拓しつつ部隊を発展させ、かつ敵の主力を引きつけることによって根拠地にかかる圧力を軽減させることにあった。かくして、二九〇〇人からなる紅二五軍は根拠地を離れた。[34] 紅二五軍が出発したとき、鄂東北の四つのソビエト区には兵員、傷病兵、機関幹部合わせてわずかに一五〇〇名が残るのみであった。一方、皖西北の五つないし六つのソビエト区に残された兵力は二千人であった。[35] 圧倒的な数を誇る国民政府軍を前にして、これだけの兵力では便衣隊に頼った遊撃戦の形態しか取ることができなかった。とはいえ、公式の党史は、「主力紅軍と地方の武装勢力は消滅しなかっただけでなく、かえって発展した。古い根拠地も完全に失われなかっただけでなく、新しい根拠地も開拓された」と述べている。[36] だが、その「根拠地」も一九三七年六月以後、大部分は失われてしまった。

日中全面戦争勃発後の一九三七年七月一三日、紅二八軍政治委員高敬亭は抗日民族統一戦線に関する党中央の方針を知ると、直ちに国民党の鄂豫皖辺区督弁公署に対して停戦交渉の提案を行った。その結果、停戦が実現し、

共同抗日の協議がなされた。停戦協定の署名後、紅二八軍および便衣隊一八〇〇名は新四軍第四支隊に改編され、抗日戦争の前線に赴いたのであった。(37)

（1）宍戸寛『中国紅軍発展史』、河出書房、一九七九年、一四六―一四七頁、および《鄂豫皖革命根拠地》編委会『鄂豫皖革命根拠地』第一冊、鄭州、河南人民出版社、一九八九年、二頁。

（2）前掲『鄂豫皖革命根拠地』第一冊、三―五頁。

（3）同右、六―七頁。

（4）同右、七―八頁。

（5）同右、九―一〇頁。ただし、次の文献は、人口を三〇万余としている。中共湖北省委組織部・中共湖北省委党史資料徴集編研委員会・湖北省档案館編『中国共産党湖北省組織史資料』（以下、『湖北省組織史』と略す）湖北人民出版社、一九九一年、二一九頁。

（6）前掲『鄂豫皖革命根拠地』第一冊、一〇頁。

（7）同右、一二頁。

（8）前掲『湖北省組織史』、二二〇頁。

（9）前掲『鄂豫皖根拠地』第一冊、一四頁。

（10）前掲『湖北省組織史』二二〇頁。

（11）前掲『鄂豫皖根拠地』第一冊、一五頁。

（12）張国燾『我的回憶』第三冊、北京、東方出版社、一九九一年、五一頁。

（13）同右、第五章。

（14）この恐怖については、同右、九四頁。

（15）同右、一〇七頁。

（16）前掲『湖北省組織史』、二二〇頁の伝えるところ、一九三一年九月から翌年春までに、ソビエト区全体で各級幹部、および大衆運動の活動家三千人が逮捕された。

(17) 同右、二三七頁。
(18) 前掲『鄂豫皖革命根拠地』第一冊、一八頁。
(19) 宍戸、前掲書、二六二頁。
(20) 前掲『鄂豫皖革命根拠地』第一冊、二五頁。
(21) 張国燾、前掲書、第三冊、一三六頁。
(22) 前掲『鄂豫皖革命根拠地』第一冊、二六頁。
(23) 同右、二七頁。ただし、『湖北省組織史』、二二一頁によれば、紅二五軍の兵力は一万三千人余であった。
(24) 前掲『鄂豫皖革命根拠地』第一冊、二八頁。
(25) 同右。
(26) 同右、二九頁。
(27) 「鄂豫皖省委給中央的報告」（一九三四年三月二四日）、中央档案館・湖北省档案館・河南省档案館・安徽省档案館編『鄂豫皖蘇区革命歴史文件彙集』（以下、『鄂豫皖』と略す）、甲2、湖北人民出版社、一九八五年、四三八―四三九頁。
(28) 「鄂豫皖省委鄭位三給中央的綜合報告」（一九三四年九月一九日）、同右、五四八頁
(29) 「鄂豫皖省委給中央的報告」（一九三三年一一月一〇日）、同右、四一六頁。
(30) 前掲『鄂豫皖革命根拠地』第一冊、三〇―三一頁。
(31) 同右、三二頁。
(32) 「鄂豫皖省委鄭位三給中央的綜合報告」（一九三四年九月一九日）、『鄂豫皖』甲2、五四五頁。
(33) 「剣同志関於鄂豫皖蘇区情形的報告」（一九三四年三月二八日）、『鄂豫皖』甲3、二二九頁。
(34) 前掲『鄂豫皖革命根拠地』第一冊、三二頁。
(35) 同右、三三頁。ただし、『湖北省組織史』二二二頁は、二千人とは「党員幹部」だとしている。
(36) 同右、三五頁。

(37) 同右、三九頁。

第二章　党組織

(1) 党　員

一九二〇年代末の湖北省の党組織において、入党手続きはほとんど有名無実化していた。[1] ある巡視員は鄂南における党組織の情況について、「希望しさえすれば入党させる」傾向があり、また地方によっては家屋毎に一支部を成立させていると指摘していた。[2] 入党の際の資格審査は、一九三〇年代を迎えて、どの程度厳格になったのだろうか。実は、一九三〇年代に入っても、党内文書は依然として「感情」が党員の獲得に重要な役割を果たしている事実を指摘し続けていた（「感情」とは、情感だけでなく、血縁、地縁、および各種のパトロン・クライアント関係に基づく私的結合を示唆する）。一九三一年春、鄂東特委が党中央に宛てた報告書は、端的に「各県の同志の入党はほとんど感情に基づいている」と述べていた。[3] 同じ頃、鄂東北では、唯寧なる県委書記が党機関を妻の実家に置き、機関を私物化していることが問題となったが、この妻の四人の兄のうち、二人が党員、二人が農協会員、また二人の姉と本人が農協会員であった。[4] 一九三一年九月の鄂東南分区委員会の決議は次のように述べる。「党の発展は多くが封建関係、感情的結合を利用したもので、階級的立場から離れている。……多くの地方党組織はすべて闘争の中で強化され、成長せずに、平和的発展、封建的結合の方式を利用している。……他方で、ある党員一人が反革命になると、彼と封建関係を持つ分子に影響し、同時に革命に対して動揺する」。[5]

こうして、「感情が組織に優越する」[6] 傾向は一九三〇年代を迎えても一九二〇年代同様、党組織を捉え続けて

いた。もちろん、その種の人的結合が利用されたとしても、それは必ずしも入党手続きに厳格さが欠けていたことを意味するものではない。だが、皖西北において、「拉夫」（人を引っ張ってくる）方式での組織発展を止めるように指示が出されていることからみて、[7] 一九二〇年代末の有名無実化した資格審査が、一九三〇年代を迎えて質的に変化したようには思われない。しかも、指導者たちは依然として組織の量的な向上を質的向上よりも優先させていた。言い換えれば、組織内部の凝集性と規模とのトレードオフについて無頓着であった。例えば、鄂南分特委は組織問題に関する決議において、「党の質的な改造」を呼びかけたその直後に、「革命的競争」の方法によって一カ月で党員数を二倍から三倍にするよう提案したのであった。[8]

「感情」を利用して組織の拡大がなされた結果、地方主義が党機関に影のように付きまとうことになった。省委、特委、および道委を構成していたメンバーは、多くが党中央から派遣された人々であり、比較的その弊害から免れていたようにみえる。だが、県委員会以下の党機関は、ほとんどが地元もしくはその近隣から集められた人間によって占められていた。これら地元から補充された幹部たちが党内に持ち込んだ顕著な特徴の一つが、地方主義であった。一九三一年四月の鄂東特委の報告によれば、鄂東の黄梅県を除く九県の県委書記はいずれも陽新県、なかでも福豊区の出身者であり、各県の県委に参加している者も少なくなかった。[9] 他の地域でも同様の現象を見出すことができる。一九三四年秋の鄭位三の報告は、鄂東北のソビエト区における幹部の大多数が黄安県人および光山県人で占められていると指摘している。鄭によれば、ソビエト区としては比較的長い歴史を誇る羅山、麻城県委のメンバーの多くも黄安、光山両県の出身者であった。[10]

入党の際の敷居が低かったことは、党員の成分からも推察できる。この点についても一九三〇年代はじめの党内文書は、一九二〇年代末と同様、さまざまな社会的背景の持ち主が党に加入していたことを示している。一九

三一年春の鄂東の状況について、ある巡視員の報告は次のように述べている。「鄂東革命委員会主席の曹王階は小商人と流氓をもって農民とみなし、大冶県書記の阮耕は小商人をもって労働者とみなし、プロレタリア階級が指導しているとの見せかけを作っている。その他、各県書記には紳士、伝道士、子曰店〔旧式の塾を指す〕の親方などがおり、本当の労農分子は一人もいない」[11]。この巡視員は続けて、鄂東特委の秘書長が陽新の大地主であることも明らかにしている[12]。別の巡視員も鄂東の大冶、鄂城の党員の多くが「難民」であり、また瑞昌の党員の多くが秘密結社である洪門会の会員だと述べている。さらに、この巡視員は鄂南の党組織の状況についても報告しているが、それによれば、区委員会幹部の多くは知識人、富農、道士で占められていたのであった[13]。残念ながら、現在利用可能な資料の中に、党員の成分に関する詳細な調査報告を見出すことはできない。たとえそのような調査が行われていたとしても、組織のプロレタリア的基盤の充実ぶりを示したいという党幹部たちが駆られやすい誘惑の前に、事実は明らかにされるよりも隠蔽される場合のほうが多かっただろう。それでも、以上の巡視員たちの報告から、入党の際の資格審査が本来排除すべき階級を弁別し、濾過する機能を果たしていなかったという印象を免れることはできない。党員の社会的背景に限っていうなら、当時の党は「階級政党」どころか、「超大衆政党」ともいうべき性格を備えていたのである。

表1に示された鄂東北のいくつかの県の党員数の変動――例によって不完全な数字であるが――から伺うことができるように、党組織の構成員は、きわめて大きな流動性を持っていた。これは一般党員だけに限られた傾向ではなかった。党組織の中核たる幹部たちの多くも、長い間党組織にとどまってはいなかった。一九三四年九月の鄂豫皖省委書記、鄭位三の党中央宛報告によれば、省委の七人だけが「老幹部」であり、鄂東北の県委書記、区委書記は一人を除いて、いずれも抜擢されてから一年と経っていなかった[14]。このような流動性をもたらした一

表1　鄂東北における党員数の変遷

	蒲　折	咸　寧	通　城	通　山	崇　陽
1929年4月	90	70	39	1103	5
1929年10月	8	124	33		6
1929年11月		70	30		6
1929年12月				300	
1931年3月	300	50		700	50
1931年7月	209	202①			40②
1933年10月	鄂東北全体で2百数十人				
1934年9月	鄂東北全体で500人程度				

出所）『湖北文件』甲8、348―350、360、378―379、404、434頁、『鄂豫皖』甲2、548頁。
①は別の記録で約300人とされている（『湖北文件』甲8、440頁）。
②は団員を含む数字である。

つの要因は、入党手続きの容易さであった。党とその政策に関する初歩的な知識も、確固たる意志も持たずに入党した人々が、一九三二年秋以降深まるばかりの危機の中で、党内に踏みとどまろうとしなかったのは、むしろ当然であった。二つめの要因は、ひとつには敵と疾病の攻撃によって与えられた人的損失であった（疾病については後述する）。さらに、党内で吹き荒れた粛清の嵐もまた流動性に拍車をかけた。大規模な粛清は一九三一年秋に行われたが、一九三三年夏にも行われた[15]。これらの粛清が実際どれだけの損害を党に与えたかは不明であるが、明白な帰結のひとつは幹部の絶対数が極度に不足したことであった。そのため、反革命活動への関与を理由にソビエト政治保衛局に捕われ、更生して間もない者が指導工作に当たる場合も珍しくなかった[16]。

以上のような組織への加入の容易さと構成員の流動性の大きさは、多くの党員に党およびその諸政策に関する基本的知識を習得する機会を与えなかった。鄂豫皖根拠地に到着したばかりの沈沢民を驚かせ、そして嘆かせたのは、まさにこの事実であった。彼によれば、幼稚な党員をボルシェビキの水準に引き上

げるのは「愚公山を移す」ようなものであった。[17]

（2） 党内コミュニケーション

筆者はかつて、一九二〇年代末の湖北省における党内コミュニケーションが、垂直的にも水平的にも途絶えがちであったことが党員による情報の同時的共有を困難にし、そのため党活動が分散化し、協働の水準が低いものにとどまっていたことを指摘した。[18] 一九三〇年代に入り、鄂豫皖省委と党中央の間で、また根拠地におけるいくつかのレベルの機関の間で、情報伝達の頻度や確実性はどの程度改善されていたのだろうか。

手始めに、党中央の決議や指令が鄂豫皖根拠地に届くまでどれほどの時間を要したかを確認しておこう。鄂東特委が上海の党中央に宛てた一九三一年七月三〇日付の書簡には、同特委が七月一〇日に党中央から受け取った全部で四〇以上の文献のリストが記されている。そのなかには、五月六日付の「鄂豫皖省委に関する決議」や六月五日に政治局で採択された「大衆を動員して反帝運動を拡大する決議」など比較的新しい文献も含まれていたが、約半年前の一月二七日に出された「羅章竜除名決議」や、やはり一月から二月にかけて出されたと思われるいくつかの通知が混じっていた。[19] ここから推察すれば、鄂豫皖根拠地は党中央の文献を定期的に受け取っていたのではなく、党中央が派遣した特派員、もしくは鄂豫皖省委が派遣した人間（交通員）を介して、数ヵ月分をまとめて受領していたのであった。

第四回囲剿が開始されて以来の戦況の悪化にともない、また党中央の江西ソビエト区移転にともない、[20] 状況は改善されるどころか、かえって悪くなったようにみえる。党中央が一九三三年七月に採択した第五回囲剿に関する決議を省委が入手したのは、翌年三月のことであった。[21] また、一九三四年三月、鄂豫皖省委に党中央から届け

られた指令は一年も前のものであった。[22]（二ヵ月前に出された党中央の文献が手に入った例もあるが、[23]これは例外とみなすべきである。）刻々と状況が変化する戦時下において、党中央から届いた数ヵ月遅れの指示や情報が、根拠地の生存と発展にとって重要な指針となったとはおよそ考えられない。時機を逸した党中央からの通信は、根拠地が好むと好まざるとに関わらず、独自の判断で行動する余地を拡大したであろう。

省委以下の党機関に対する情報の伝達はいかに行われていただろうか。党中央から時折届けられる文献を複写して根拠地内の各地に送る以外、省委や特委は独自に通告や指示を作成し、また機関誌を発行していた。印刷物の発行状況に関する記録はごく限られたものである。省委、鄂東北道委、そしていくつかの県委が機関誌を発行していたが、それらが発行されていた期間、発行部数も明らかではない。[24]それでも、皖西北特委の刊行物についての記録はいくらか存在している。同特委は一九三一年春には四人からなる発行科を設け、一台の印刷機を用いて『火花』、『紅旗』という二種類の機関誌を発行していた。六月までに両誌とも第三号までが発行済みであったが、発行部数は前者が各号約三百部、後者が一九〇部から三九〇部の間にとどまり、皖西北の根拠地内に行き渡るにはあまりにも少なかった（しかも、『紅旗』は印刷機が破壊されたため、夏には停刊を余儀なくされた）。皖西北の各県委は一台づつ印刷機を所有していたが、すべてが使用可能とは限らず、区委は印刷機をもっていなかった。[25]印刷機がある場合でも、紙やインクの不足はしばしば解決できない問題であった。[26]もちろん、文書が印刷されることと、それが各地に確実に届けられることは別であった。

一九三一年六月に党中央に送られた皖西北特委の報告は、いかなる種類のものであれ文書の扱い方がいかに杜撰であったかを教えてくれる。「ここ数ヵ月、届いた文献や報告は一度も整理されていない。通信袋の中はひどく入り乱れていて、多くの重要な文献が散逸している。必要な文献を探し出そうとしてもどうしようもない。発

送するにせよ、書き写すにせよ、常務委員会に提出するにせよ、しばしばどこへ行ったかわからない。これが特委の工作に与える影響は大きい」[27]。また、この報告によれば、特委から支部に至るまで、発行科にようやく専門の責任者がついたが、党報や文献を靴などと一緒に包んで送る習慣がまだなくなっていないのであった[28]。

ソビエト機関においても、文献の紛失、および「ため込み」は珍しいことではなかった。鄂豫皖区ソビエト政府通知は書いている。「これまで各級ソビエト政府交通局秘書処および全責任者同志を調査したところ、多くは文献と情報の重要性に注意しておらず、往々にして紛失と停滞を引き起こしている（例えば、陂安南の交通員、張友元は重要文献を紛失した）。そして大事を引き起こしている。これらの誤りのうち、最も多いのは、ソビエト政府秘書処の責任者が責任を負わず、上級から来た文献をすぐに計画的に分けて発送せず、無造作に文書袋に押し込んだり、一人の責任者同志が見た後、鞄や風呂敷に入れて包んでしまい、後は問題にしないことである[29]」。（ソビエト政府の場合、上級から届いた文献は、交通局秘書処が管理し、交通員に持たせて下級の交通局秘書処に渡すという手筈になっていた。）われわれはここから、杜撰に扱われていたのは文献というよりは、異なるレベルの機関の間の情報伝達そのものではなかったかと考えたくなる。そうだとすると、党中央または省委が作成した文書が県委、区委を経由して各支部にまで伝えられることはまずありえなかった。事実、皖西北特委は、党の文献、指示、工作計画の多くが県委と区委の段階にとどまっていて、支部にまで伝達されていないと述べていた[30]。沈沢民もまた党の一切の決定は支部と大衆に到達しないと嘆いている[31]。

「下から」の情報伝達は、「上から」のそれに比べて、さらに貧弱であったようにみえる。省委、特委、および道委は、下級の党機関が報告を怠っていることにしばしば不平を述べていた。「われわれの同志には二つの大きな欠点がある。ひとつは何も報告しないことだ。……もうひとつは多くを述べるがまったく関係がなく、また中

味のない重複した報告をすることである」[32]。だが、上級機関がいかに不平を述べようとも、そもそも幹部を含めて、文盲ではなくとも満足に文章の書けない党員が大多数を占めていたのだから、書面での報告が定期的に上級機関に送られることなど、およそありえなかった。省委でさえ文章の書ける人間は貴重な存在であった。ソビエト区が縮小を続け、幹部人材の不足が深刻さを増していた際、鄂豫皖省委にとって、「〔省委の〕秘書の人材は文字を知っているだけのものでも」よかったのであった[33]。省委書記の鄭位三は二ヵ月後の報告で次のように書いた。「地方県委の多くは政治、文化水準が低く、全ソビエト区で一つの文句をはっきり書ける秘書は一人もいない。一人も字が読めない遊撃隊や区委もある。ある遊撃隊では、帳簿をつけられる人間さえいない。県委幹部には口頭で意見を伝えるのだが、工作がきちんとできる人間は一人もいない」[34]。県委がそのような状況であるなら、その下の区委や支部が、書かれた言葉で自らの状態を表現することはほとんど期待できなかった。

とはいえ、コミュニケーションはたんに文書を媒介にして行われるだけではない。党員代表大会は、口頭での情報交換を行う場を提供するものであったが、この論文が考察の対象とする期間、鄂豫皖辺区党大会は一九三一年六月に約九百人の代表を集めて一度開催されたきりであった[35]。代表大会の開かれない期間、文書（時には金の場合もあった）を届けるためだけでなく、口頭での情報伝達を行うために危険を冒して根拠地内を移動していたのが、巡視員と交通員であった。後者が必要に応じて派遣された使者であったのに対して、前者は定期的に――少なくとも制度上は――下級機関に派遣された上級機関の代表者であった。巡視員がどの程度の頻度で送られたのかは不明である。彼らの活動ぶりについて、党内文書には異なった記述が見られる。ある文書は、巡視員が「旅行式」のおざなりな巡視しか行っていないことを批判しているが[36]、別の文書は、ソビエトが派遣した巡視員について、彼らが誤りを発見する度に下級機関に「改造」を命じ、工作を沈滞させてしまったとしている[37]。巡視

員ほど権威主義的に振舞うことはなかったであろう交通員も、到着先からつねに歓迎されるとは限らなかった。皖西北の寿県中心県委が紅軍に送った交通員たちは、過去に同県委が「改組派」を多数紅軍に送り込んだ経緯から、いずれも信用されず、蒲団さえ与えられないため、皆凍傷にかかって帰ってくるのであった。[38] したがって、さまざまな機関の緊密な結合を実現するために、巡視員と交通員が果たした役割を大きなものだったと考えることはできない。事実、戦況が悪くなるにつれて、それらを派遣することは次第に困難となった。一九三四年秋には、鄂東北道委は四人の巡視員を派遣できたが、鄂豫皖省委は人員不足から巡視員を送ることができなくなってしまった。[39]

こうして、第四回囲剿が開始されると、各支部からはいうまでもなく、時には県委からでさえ、党中央はもちろん省委の姿もかすかにしか見えなくなった。そして、県委以下の機関は、独自の判断と自前で調達した資源に頼って、もっぱら生き延びるための戦いを強いられていたのであった。

（3） 価値と行動様式

ここでは党員の日常生活から、限られた側面においてではあるが、彼らの価値と行動様式の復元を試みることにしよう。支部生活は、一九二〇年代末同様、一九三〇年代を迎えても、党内文書によってしばしば「不健全」、「停頓」、「作用を果たしていない」などと表現された。これにはいくつもの理由があった。

幹部を含めて多くの党員は機関誌や文献を読まなかった。[40] もっとも、すでに述べたように、彼らの多くは文盲であり、しかも、いかなる種類の文書であれ、各支部にまで届けられることはまれだったのだから、彼らは読もうとしても読めなかったというべきだろう。その結果、党員は党の政策や戦略について無知であるだけでなく、

自らの置かれた客観的な情況についてもよく理解していなかった。外部からの情報が途絶えがちな情況では、鄂豫皖省委の通告が指摘するように、党員の視野が狭く限定され――「座井観天」（井戸の中から天を見る）と表現された――自らが生活する土地のことにのみ関心が集中するのは無理もないことであった。[41] すでに述べた地方主義的傾向は、こうした視野の狭さの原因でもあり、また結果でもあった。

党員が党費を定期的に納入していたとは思われない。一九三一年春、鄂南の情況を調査した巡視員の報告は、党員が党費を「納めたり納めなかったり」していると書いている。[42] また、鄂豫皖省委の党中央宛報告によれば、地方党、ソビエト機関の収入は特務隊の活動に依存していたのであった。[43] すなわち、党費や各種の税金ではなく、特務隊による地主、「反革命分子」の収奪こそが主たる財源であった。

もし、党費の納入が党への献身ぶりを測る一つの尺度であるのなら、それを納めない党員が党のために積極的に活動しなかったのは怪しむにたりない。多くの党内文書は、彼らの多くが日常的な党活動に参加しないことを批判している。一九三三年五月の鄂豫皖省委の通告は次のように述べる。「最もひどいのは、支部の同志の多数が工作をしないことだ。われわれの党規約では、各同志は日常の党活動をしてはじめて党員だと定めてあるのに、現在の支部の大多数の同志は、大衆への宣伝工作と組織工作をしない」。[44] だが、工作への不参加を党員たちの消極性にのみ帰すことはできない。上から下まであらゆる党機関において系統だった分業が確立されず、つねに一人か二人の幹部がすべての工作を背負い込む傾向も活動の活性化を妨げていた。[45]（あるいは、他の党員の積極的な協力を得られないために、少数の幹部による「包辦」が余儀なくされていたのかもしれない。）

党員の会合の様子はどうであっただろうか。鄭位三の報告によれば、県委でさえ、政治的、戦略的問題を議論するのは難しかった。「党員の文化的、政治的水準は特に低い。例えば、文献を討論する場合でも道委が詳しく

県委に教えないと、県委はどう討論してよいかわからない。支部は、ただ某同志が不衛生だの、歩哨に注意が足りないだの、班長による工作の分配に従わないだのといっているにすぎない。県委や区委は会合を持っても、道委が参加しないと、ひとつの事務的問題でも意見がまとまらず、批判しあってばかりだ。そのくせ、遊撃戦争中の保守主義とか、大衆の組織化という問題になると、批判する同志はいないのだ。同志たちは、上級幹部が参加しない限り会合を開きたがらず、むしろ戦争をやって食糧を奪うことを好んでいる」[46]。ここからわれわれは、「極端な民主主義」と「家父長制」としてしばしば批判された党組織に伴う二つの両極端な傾向――話が容易にまとまらない下級機関と、それに対して権威主義的に介入する（あるいは介入せざるをえない）上級機関――が裏腹の関係になっていたことを理解することができる[47]。

さまざまな困難に直面した際、党員はどこまで敢然と革命の大義に踏みとどまることができただろうか。どうみても困難な工作を自ら買って出るような党員は、少数であった。とりわけ困難であったのは白区工作であったが、多くの党員はそれに尻込みし、青年団員の間では、白区に派遣されることが一種の処罰とさえ考えられていた[48]。そして、敵の攻撃を受けると、すぐに変節者が現れた。鄂豫皖省委が一九三三年秋に党中央に宛てた報告によれば、「破壊を受けた地方では、一部の大衆、および党員までもが革命の前途に疑念を抱いて寝返り、白旗を立てるといったことが数多く発生している」[49]。沈沢民は、やはり党中央宛ての別の報告において、敵が占領した場所の党組織がすぐに消滅してしまう傾向について語っていた[50]。皖西北の雷麻店では、四〇〇人を集めた大衆集会の最中に敵の攻撃を受けると、党員と青年団員が真っ先に逃げてしまった[51]。同じく皖西北の赤南でも党とソビエト機関が、敵との戦闘に際してこっそりと軍を引き上げた結果、大衆が敵に包囲されてしまったのであった[52]。

このようにみてくると、党組織が、新たな価値と階級的連帯を基礎にした新たな社会的連帯の培養器になって

いたかどうか、疑わしいといわざるをえない。沈沢民は、憤懣やるかたない調子で次のように書きつけている。「支部のなかの党員、団員はほとんど誰も共産党とは何か理解していない。名目上は共産党員だが、実際は比較的積極的な農民であり、その大多数は党の組織系統さえわかっていない」[53]。沈が示唆するように、党員が革命の大義に忠誠を誓った鉄の意志を持つ戦士というより、農民にはるかに近い存在――その内面的世界と行動様式の両方において――であったなら、彼らは党に何を期待し、また実際に何を党から得ていたのだろうか。

党員は幹部ともなれば、生産活動から離れ、給料に頼って――その金額は地位によってさまざまであったが――生計を立てることができた。もちろん給料だけが党員の特典のすべてではなかった。党員の日常生活において、病気はひとつの定数であった。蠅、蚊、南京虫、虱は「四害」として知られており、マラリア、赤痢、皮膚病などが猖獗を極めていた。張国燾によれば、疾病の流行による被害は、時として敵の攻撃よりも甚大であった[54]。張自身も鄂豫皖辺区に到着して間もなく重い胃腸病を患い、あやうく命を失いかけた[55]。彼は回復できただけ運が良かった。沈沢民は一九三三年一一月に肺病のため死亡した。彼の死後、省委代理書記となった徐宝三（鄂東北道委書記も兼ねていた）も「肺病の第三期」でほとんど活動不能であった[56]。省委宣伝部長、成仿吾も病のため、決議を起草できなかった[57]。紅二五軍軍長の呉煥先、七四師政治委員の戴継英も回復できなかった。同軍七五師を構成する三団の団長、政治委員の半数も病人であった[58]。興味深いことに、治療のための薬代は党機関の「公的」支出によっていた。皖西北特委秘書処の事務科の党員は、「飲食が不潔で」よく病気にかかり、同特委成立後の二ヵ月足らずで、彼らのために西洋式薬品を除いて、漢方薬代だけで六〇から七〇元が支出されたのであった。この金額は特委の毎月の収入の約五パーセントを占めた[59]。皖西北中心県委の報告においても、県委員が次々に病気にかかり、医薬品代が県委の工作に「相当な影響」を与えていると指摘されている[60]。本来は個人的な支出である

はずのものが、公的な支出によって賄われていたことはほぼ疑いない。党員とは病気の際の保障を得られる人々であった。

この他、党員はいくつか具体的な利益――必ずしも物質的な利益に限られない――に与る機会に恵まれた。党に名を借りた個人的な報復（籍党報復）は後を絶たなかった。[61] 土地改革に際して、党員の一部はよい土地の優先的な分配を要求した。[62] また、別の一部は村内の「顔役」として振舞っていた。鄂豫皖省委の通告は書いている。「少しよい党員でも、紅軍を擁護し、運輸隊および各種の社会工作に参加し、大衆と比べて少し積極的なだけだ。悪い党員はこれらの工作をするにしても、大衆と比べてさらに消極的だ。はなはだしきは、農村での階級区分の設定を仕切り、婚姻を解決し、旧社会の排頭、里長の役割を果たしている。[63]」

以上の点からみて、筆者が一九二〇年代末の党組織に見出した「散漫な」性格は、一九三〇年代に入っても基本的には変わらなかったといいうる。戦争がもたらした危機情況が、党組織の凝集力を高める方向に何ら作用しなかったと考えることは誤りだろう。だが、新しい価値よりは農村社会における従来の人間関係を重んじる農民たちを組織に引き入れたこと、党員数の減少を埋め合わせるために、つねに量的拡大が質的向上に優先される傾向にあったこと、根拠地が情報伝達の難しい地理的環境に置かれていたこと、そして凝集力を高める技術的手段（党報、宣伝ビラなどの印刷物、および情報通信網）の不足と不備は、厳格な組織を作り上げる障害となっていた。

その構造的性格により、さまざまな社会的背景をもつ多くの農民が、党の境界を跨いで頻繁に出入りを繰り返していたのだとすると、われわれは党と農民という単純な二項対立の構図の中で農民の発動した「勝手な包摂」の諸戦略を考察することはできなくなる。農民は自ら党員になる（あるいは、他の誰かによって党内に送り込まれる）ことによって、「内側から」党の政策にさまざまな操作を加えることが可能となったであろう。これら党員

たちは、一方で農民たちと伝統社会を特徴付けるさまざまな絆――血縁、地縁、パトロン・クライアント関係など――によって結びついていた。その限りで、彼らは農民たち――農民一般ではなく、彼らと私的に結びついていた農民たちのことだが――とある程度利害を共有していた。だが、他方で農民は党員証を手にすることによって、利益の分配の面で一般の農民よりも有利な立場を占めることができたのだから、党員と農民の間に利益をめぐる競合・対立関係も必然的に生じることになったであろう。したがって、農民は党員とある場合には共謀し、別の場合には競合しながら「勝手な包摂」の諸戦略を適用したであろう。

（1）高橋、前掲論文、三―五頁。
（2）「楊柏齢関於鄂南情況的報告」（一九二九年一一月五日）、中央档案館・湖北省档案館編『湖北革命歴史文件彙集』（以下、『湖北文件』と略す）甲8、三八六頁。
（3）「汪洋、全生吾給中央的報告」（一九三一年四月一九日）、同右、三一七頁。
（4）「舒伝賢為被処分給中央的報告第一号」（一九三一年四月二七日）、『鄂豫皖』甲4、二八五頁。
（5）「中共鄂東南分区委員会関於発展党的組織決議案」（一九三一年九月二二日）、『湖北文件』甲8、四〇八頁。
（6）「皖西北特委関於各部門工作情況給中央的報告」（一九三一年六月）、『鄂豫皖』甲4、四一一頁。
（7）「皖西北特委組織工作決議案」（一九三一年五月）、『鄂豫皖』甲4、三一一頁。
（8）「中共鄂東南分区委員会関於発展党的組織決議案」（一九三一年九月二二日）、『湖北文件』甲8、四一〇頁。ただし、「一切の封建的に引っ張り込む方式はとってはならない」と主張している。
（9）「汪洋、全生吾給中央的報告」（一九三一年四月一九日）、同右、三一四頁。
（10）「鄂豫皖省委鄭位三給中央的綜合報告」（一九三四年九月一九日）、『鄂豫皖』甲2、五四六―五四七頁。
（11）「汪洋、全生吾給中央的報告」（一九三一年四月一九日）、『湖北文件』甲8、三一四頁。
（12）同右、三一六頁。
（13）「黄火青給中央的報告」（一九三一年七月一一日）、同右、四三三頁。

(14) 「鄂豫皖省委鄭位三給中央的綜合報告」（一九三四年九月一九日）、『鄂豫皖』甲2、五四二頁。
(15) 台運行編『鄂豫皖紅軍史話』、安徽人民出版社、一九八九年、一七八頁。
(16) 「鄂豫皖省委給鄂東北道委信」（一九三四年六月二六日）、『鄂豫皖』甲2、四九五頁。
(17) 張国燾、前掲書、第三冊、五八、八三頁。
(18) 高橋、前掲論文、一〇―一三頁。
(19) 「中共鄂東特委給中央的信」（一九三一年七月三〇日）、『湖北文件』甲8、三二五―三二七頁。
(20) 周恩来や秦邦憲ら中央指導者が中央根拠地に移動したのは、一九三一年八月であったが、張国燾によれば、彼がこの事実を知ったのは、一九三二年春のことであった（張国燾、前掲、第三冊、九五頁）。
(21) 「鄂豫皖省委関於粉砕五次〝囲剿〟中鄂豫皖蘇区党的緊急任務決議案」（一九三四年四月二五日）、『鄂豫皖』甲2、四六五頁。
(22) 「鄂豫皖省委給中央的報告」（一九三四年三月二四日）、同右、四三六頁。
(23) 「鄂豫皖省委鄭位三給中央的綜合報告」（一九三四年九月一九日）、同右、五三三頁。
(24) 鄂豫皖省委は『紅旗』（一九三二年四月創刊）、『紅旗副刊』（一九三二年一〇月創刊）という機関誌、そして『捷報』という新聞を発行していた。鄂東北道委は『鄂東北通訊』（一九三三年一月創刊）を、そして黄安県委は『火線』（後に『戦闘報』、『紅旗』と改名するが、一九三二年秋に停刊）を発行していた（陳立明・邵天柱・羅恵蘭主編『中国蘇区辞典』、南昌、江西人民出版社、一九九八年、三八九―三九〇頁）。これら刊行物のほとんどは長続きしなかった。
(25) 「皖西北特委関於各部門工作情況給中央的報告」（一九三一年六月）、『鄂豫皖』甲4、三五六頁、および「皖西北中心県委関於幹部訓練和工作計画給中央的報告」（一九三一年八月二日）、『鄂豫皖』第四冊、五〇五頁。
(26) 「皖西北特委関於各部門工作情況給中央的報告」（一九三一年六月）、『鄂豫皖』甲4、三三四頁。
(27) 同右、三三三頁。
(28) 同右、三四八頁。

(29)「鄂豫皖区蘇維埃政府通知第七号」（一九三一年七月九日）、『鄂豫皖』甲3、五〇頁。
(30)「皖西北特委関於各部門工作情況給中央的報告」（一九三一年六月）、『鄂豫皖』甲4、三三八頁。
(31)「鄂豫皖省委給中央的綜合報告」（一九三三年一〇月）、『鄂豫皖』甲2、三八二頁。
(32)「中共鄂東北道委為加強支部生活問題給各県委的指示信」（一九三四年八月一九日）、『湖北文件』甲8、三四四頁。
(33)「鄂豫皖省委給河南省委信」（一九三四年七月六日）、『鄂豫皖』甲2、五〇九頁。
(34)「鄂豫皖省委鄭位三給中央的綜合報告」（一九三四年九月一九日）、同右、五四二頁。
(35)張国燾、前掲書、第三冊、七二頁。
(36)「鄂東組織決議草案提綱」（一九三一年一〇月一四日）、『湖北文件』甲8、三三三頁。
(37)「鄂豫皖省委給中央的報告」（一九三三年一月五日）、『鄂豫皖』甲2、二九五頁。
(38)「劍同志関於鄂豫皖蘇区情形的報告」（一九三四年三月二八日）、『鄂豫皖』甲3、二三〇頁。
(39)「鄂豫皖省委鄭位三給中央的綜合報告」（一九三四年九月一九日）、『鄂豫皖』甲2、五四一―五四四頁。
(40)「鄂豫皖省委通告第一〇七号」（一九三三年五月二四日）、同右、三四〇頁。
(41)同右。
(42)「中共鄂南特委周然給中央的報告」（一九三一年三月一二日）、『湖北文件』甲8、四〇四頁。
(43)「鄂豫皖省委給中央的報告」（一九三二年二月二日）、『鄂豫皖』甲2、二五〇頁。
(44)「鄂豫皖省委通告第一〇七号」（一九三三年五月二四日）、同右、三四二頁。
(45)「鄂豫皖省委給中央的報告」（一九三二年二月二日）、同右、二四八頁。
(46)「鄂豫皖省委鄭位三給中央的綜合報告」（一九三四年九月一九日）、同右、五四八頁。
(47)「鄂豫皖省委関於粉碎五次〝囲剿〟中鄂豫皖蘇区党的緊急任務決議案」（一九三四年四月二五日）、同右、四五九頁。
(48)「団皖西北特委関於擁護拡大紅軍和加強蘇維埃政権建設等情況的報告」（一九三一年九月一四日）、『鄂豫皖』甲4、五五七頁。

(49) 「鄂豫皖省委給中央的綜合報告」（一九三三年一〇月）、『鄂豫皖』甲2、三八〇頁。
(50) 「鄂豫皖省委給中央的報告」（一九三三年一一月一〇日）、同右、四一九頁。
(51) 「団皖西北中心県委報告第四号」（一九三二年五月一七日）、『鄂豫皖』甲4、五六九頁。
(52) 「鄂豫皖省委給皖西北道委指示信第一号」（一九三四年五月）、『鄂豫皖』甲2、四七七頁。
(53) 「鄂豫皖省委給中央的綜合報告」（一九三三年一〇月）、同右、三八二頁。
(54) 張国燾、前掲、第三冊、九六頁。鄂豫皖ソビエト区のみならず、中央ソビエト区においても、疫病は猛威を振っていた。江西省ソビエト政府の一九三二年一一月の活動報告によれば、この数ヵ月に赤痢に感染した患者は一三〇〇人余に及び、いくつかの地区では、疫病による使者が百人余にのぼったのであった（日本国際問題研究所中国部会編『中国共産党史資料集』（以下、『資料集』と略す）第六巻、勁草書房、一九七二年、一五二頁）。
(55) 張国燾、前掲書、第三冊、九六頁。
(56) 「鄂豫皖省委給中央的報告」（一九三三年一月五日）、『鄂豫皖』甲2、二八九頁。
(57) 「鄂豫皖省委給中央的報告」（一九三三年一一月一〇日）、同右、四一七頁。
(58) 同右、四〇五頁。
(59) 「皖西北特委関於各部門工作情況給中央的報告」（一九三一年六月）、『鄂豫皖』甲4、三三四―三三五頁。
(60) 「皖西中心県委関於幹部訓練和工作計画給中央的報告」（一九三一年八月二日）、『鄂豫皖』第四冊、五〇六頁。
(61) 「鄂東組織決議草案提綱」（一九三一年一〇月十四日）、『湖北文件』甲8、三三一頁。
(62) 「洪紀給長江総行委的報告」（一九三〇年一〇月九日）、同右、三九二頁。
(63) 「鄂豫皖省委通告第一〇七号」（一九三三年五月二四日）『鄂豫皖』甲2、三四二―三四三頁。